

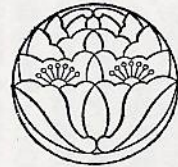
(問) 「夜中に念仏をいたします時には必ず起きていてしなければなりませんまいか、また珠数や袈裟などを用意して申さねばなりませんまいか」

(答) 「念仏の行は行住座臥を嫌はないのだから、伏して申そうとも、居て申そうとも心に任せ時によるのだ。数珠を取ったり、袈裟をかけたりのことも、亦折により體に従ってどちらでもよろしい。詰り威儀というものはどうでも真の心で念仏を申すことが大切だ」

(法然上人)



## 浄土宗のみ教え



私達のお宗旨

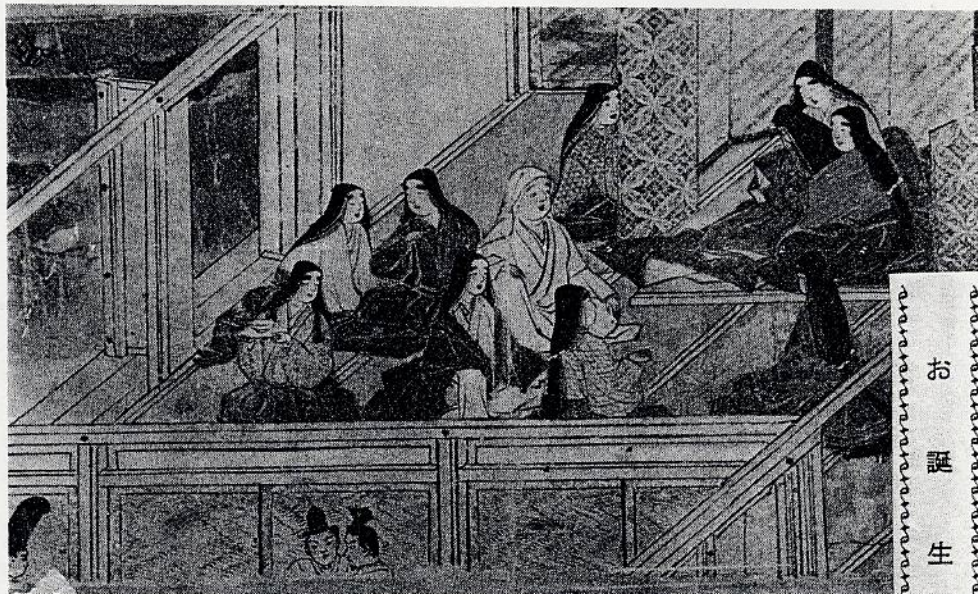
仏教には、いろいろな宗旨、宗派があり、修業の方法も千差万別です。

西のはるか彼方に極楽という国があり、その中心である阿弥陀様のお名前を称えて念ずれば、死後は必ず、その国(極楽)へ往生生まれかわる)させていただけるといふ教え(経典)に出遇い、法然上人が「われ浄土宗を立つる心は凡夫の報土に生まるることを示さんがためなり」のご決意のもと、即ち、どんな罪深い私達であっても立派に弥陀の浄土(報土)に往生することができるといふ確かな信念により「浄土宗」をおこされました。

くわしくは往生浄土宗といひ、極楽(浄土)へ、生まれ代って行く教えであり、阿弥陀仏のお誓いを信じて「南無阿弥陀仏」とそのみ名を称えることによつて、いかなる苦しみや罪、悩みもきえ、明るく、安らかで、なごやかな心持ちで日暮らしをさせていただけるといふ尊いお宗旨です。



# 法然さま



お誕生

この尊い浄土宗を開かれ、私達が救われていくただ一つの道である「南無阿弥陀仏」を称えるようお示し下さったのが法然さまであります。法然さまは、今から八百五十年ほど前、平安時代の末期（長承二年）に、美作国（今の岡山県）にお生まれになり、父は漆間時國という武士で、母は秦氏と申しました。二人の間には永いあいだ、子供が授からず、熱心に神仏に祈っている、ある夜母親の秦氏は鞆刀を呑む夢を見て、珠のような男の子に恵まれました。

これはきつと仏さまの授かり子であるということで「勢至丸」と名づけ、大切に育てました。

## 父の遺言

勢至丸は、文武両道にすぐれ、すくすくと育ちましたが、九才のとき、父の時國とかねてから仲の悪かった源内武者定明の夜討ちにあつて、時國は深傷をおって亡くなりました。そのいまわの際に、勢至丸を枕元に呼びつけて、「お前も武士の子であるから仇うちを考えるのは当然であるが、恨みに報いるに恨みをもってするかぎり、両家の間に、争いやいがみあい

絶えることはないであろう。それよりも、出家して私の菩提を弔い、人々が平和な暮しが出来る道を求めて欲しい」と遺言され、息をひきとられました。

## 出家・求道

一時叔父にあたる近くの菩提寺観覚得業の許に預けられ仏法を勉強し、やがて十三才の折、京の比叡山に登り、本格的な仏教を学ぶため、多くの高僧のもとで修業し、十八才の秋、叡空上人より、法然房源空という僧名を与えられ、真剣な求道生活を続け、沢山の僧に道を求め、又、自ら報恩蔵という小さな堂に籠り、五千巻からなる一切経も何度か読破した。

当時の京都の街は、戦乱の中にあり、人々は飢えと疫病に苦しんでいました。法然さまが学んだ仏教の教えは、いづれも尊いものではありませんでしたが、現実の人々を救う教えではないことを知り、悶々とした求道の毎日を送っていました。

問 上人の御船のよしうけたまわりて推参し侍なり。世をわたる道まぢまぢなり。いたなるつみありてか、かかる身となり侍ら

ん。この罪業おもし身、いかにしてかのちの世たすかり候へき。



仏教が万民を平等に救う教えなら、厳しい修業や、むずかしい教え、戒律を守らなくても、やさしく、だれにでもできる方法があるべきだ、との願いから、さらに一切経を読み直し、恵心僧都の『往生要集』の中で、唐の善導大師が口に念仏を唱えることを強調していることを知り、ついに『観経疏』のなかの、「一心にもっぱら阿弥陀仏のみ名を称え続ける者は、阿弥陀さまのご本願によって間違はなく極楽に往生ができる」という一文に接して、私が長い間求め続けていた教えはこれなんだと気づき、とめどもなく流れる涙とともに、今までの苦勞が報われた喜びをかみしめ、一心不乱に念仏を称え続けました。



善導大師さま

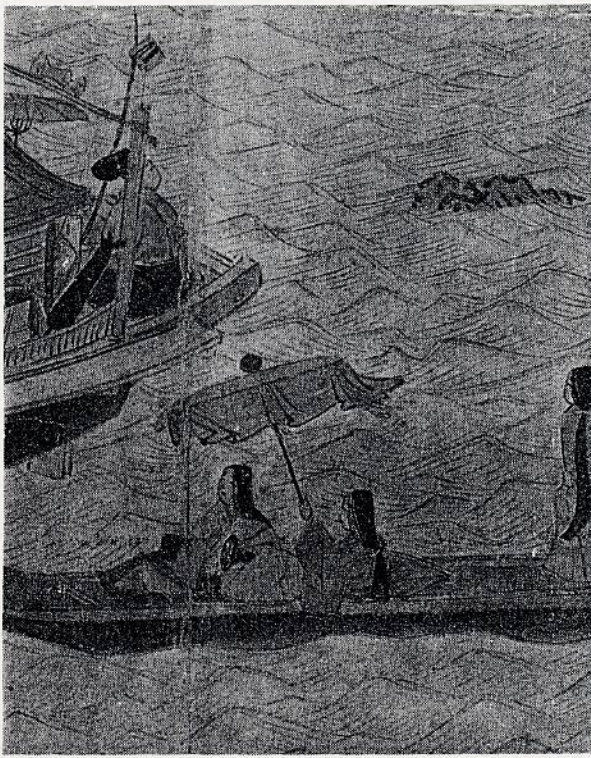
この道を見つけたため、罪深く、愚かものを救いとる易しい道すなわち他のすべてを捨てて、口に南無阿弥陀仏を称えて、阿弥陀様のご本願におまかせすることによるものであるとの確たる信念のもとに法然さまが浄土宗を開宗したのは、今から約八百年前、承安五年の春、源空四十三才の時であります。

こうして、一部特権階級に独占されていた仏教を、一般大衆に開放した法然上人のご生涯は、単に我々浄土宗だけの慶びではなく、日本の大衆仏教の夜明けであり、一大宗教改革でもあるわけです。

隋の大業九年（六一三年）山東省に生まれました。幼い時出家し中国の各地を遊歴して浄土の行業の実践につとめ、後に自から信ずるところをもとに「観経疏」をつくられました。善導さまは、この世の中で苦しみや悩みのどん底にあえぐ罪深い人間も念仏を称えれば浄土の往生することが出来ると教えられ、自から数万巻の阿弥陀経を写経、中国の浄土教を大成され、六八一年六十九歳でなくなりました。

（遊女）  
 助けにもさようにて世をわたり給らん罪障まことにかるからざれば、報酬またはか（か）がたし。もしかからずして、世をわたり給ぬべきはかりことあらば、すみやかにそのわざをすて給べし。もし余のはかりこともなく、又身命をかへりみざるほどの道心いまだおこりたまはずば、たゞそのままにて、もはら念仏すべし。弥陀如来は、さやうなる罪人のためにこそ、弘誓をもたてたまへる事にて侍れ。ただ深く本願をたのみてあへて卑下する事なかれ。  
 （法然上人）

（もし、このようなことをしないで、世の中を暮していく道があるならば、急いでこの仕事をかわりなさい。もしまた、どうしても、ほかの手段はないが、いのちを捨てる気があるというならばこの仕事をやめなさい。手段もないし、それほどの道心もないというならば、ただ今のままで念仏を称えなさい。阿弥陀さまは、このような罪深いもののために、お誓いをたてられたのですから。と云う意味です。）



室の泊において遊女を教化される法然上人



# 本尊 「阿弥陀如来」さま



阿弥陀さまとは、どんな方かと申しますと、その昔、法蔵菩薩という求道者があって、世自在王仏という仏さまの教えを聞いて、全てのものを捨てて、この世で苦しんでいる人々を救うために、本当の信仰を求め、「一切の濁れやしみのない国土（極楽浄土）を建設し、人々がその国へ行きたいと願うならば、いかなる人も、平等に、差別をせずに、必ず迎え

入れてやろう」等の四十八項目に分けた願をおこされた。これをご本願といい、その一つ一つのすべてが、かなえられないならば、私は決して仏にはならないと誓を立てられ、永い間修業を積んで、ついにすべての願を成就されました。この方を「阿弥陀如来さま」とお呼びしております。

## 焼香

「香は信心の使い」といわれ、その煙が立ち登るとき、私たちの気が仏さまの方へ通じるような気が致します。

お香の種類は伽羅、沈香、白檀等があり、全て輸入されています。一般には五種類の香を混ぜた五種香（抹香）が使われております。

焼香をするには、右手の親指、人差指、中指の三指を使って香をつまみ、これを仰向けて左手に受けながらいただき、火にくべます。回数は特に定まっておりますが、後述の様に三回以内で行います。

回数の意味は一回が一心不乱に、迷うことなく、二回行うのは戒（教え）と、定（静かさ）を表わし、智慧の火で供養する意、三回は三世（過去、現在、未来の諸仏に捧げる意、または三毒煩惱（貪欲、瞋思、愚

## 線香

焼香より簡単で、香りが長持ちするように作られました。本数についてはお焼香の回数と全く同じと考えてよろしいのです。ただ、気をつけなくてはならないのは、決してお線香を曲げて立てぬよう

う。心くばりをするのが大切ですよ。



浄を保つ意味とされております。

痴（ち）の「むさばり」、「いかり」、「おろかさ」を焼きつくし、清

